

縁あって遠く九州よりこの群馬の地に移り住んで早や10年がたとうとしている。世間では中心部のドーナツ現象や商業の停滞化などが懸念されてはいるが、私の目から見れば群馬の地は子育てをするには好適の地ではないかと思える。まず第一に都会にはない自然の風景を市街地でも少し足を伸ばせば簡単に満喫できる点。利根川のゆったりとした眺め、赤城をはじめ上毛三山の稜線の凜とした姿など枚挙に暇がない。また、もう一つ他の県にはないものとして至るところに公園が設置されていることも挙げられる。少子化の影響かどこかしら寂しさが漂うのは仕方ないとして、休日など親子でキャッチボールや語らいに利用できる場所に恵まれていることには本当に感謝している。

またこうした所謂ハード面に加えて、小学校を中心にした活動を自身の子供を通して眺めても同様のことがいえる。例えば、伝統行事としても定着している「上毛かるた」の存在がある。これまでに転勤を重ねた都市にはついぞ見られぬ群馬独特のものである。平易な言葉と素朴な絵に親しみ、遊びの中から郷土群馬を楽しく学んでいくことができる。私にとっては何よりの最良の郷土科教科書だ。

また県下に幅広く設置されている子供のための施設の取り組みは単に外的な設備、機能とは異なる魅力を有しているのではないだろうか。例えば、前橋公園とそれに隣接する児童遊園地（ルナパーク）の存在。本当に廉価で日がな一日家族で楽しめ、そこに携わる多くの職員の方の尽力で整備されたさり気ない風景はお金では買えない癒し、安らぎを来訪者に与えてくれる。それ以外にも桐生市の桐生が岡動物園の無料運営やぐんまこどもの国で繰り広げられる子供の成長をバックアップしてくれる様々な教室企画など。これらは日本を半ば席卷するテーマパークでは味わえない喜びを与えている。

いわば必要以上のお金を使わず、全ての県民（とりわけ子供）に平等に喜びと癒しの空間を与えている点は全国でも貴重なものとして高く評価できる。

さて、こうした恵みともいべき環境を今の群馬は果たして生かしているであろうか。このことについては私見だが、行政もそして住民も意外と無自覚な印象を受ける。いわば宝物とも呼べるこれらの環境を今こそみんなで有効利用し、広い意味での群馬教育に役立てることこそ今求められているものではないだろうか。

具体的な提案としてはまず上記の諸処の施設を「教育基地」としてネットワークで結ぶことを挙げたい。各市町村ごとの運営ではなく、それぞれに知恵と協力態勢を密にし、子供たちの学校以外での教育の場として整備していくことで無限の可能性が考えられる。例えば、当節流行の体験学習に関しても導入が可能である。

従来はともすれば学校の教師が腐心しながら予定を組み、駆け足に近い形でその学習を消化せざるを得ない面も少なからず見受けられる。この点を解消するには学校だけでその学びを背負い込まず、広く協力してくれる機関や人々に助力をお願いすることが肝要だ。時代は秒読みの状況で団塊世代と呼ばれる方の大量退職時代を迎えようとしている。この人たちの持つ叡智や社会経験は間違いなく群馬の教育や子育てにも貴重な財産となるはずである。そうした方々を簡単に定年やリタイアという文字で括って関係を積極的に持たな

いと言うのは愚かであるというしかない。

具体的にはこうした方々、そして従来から育成会や地域活動を指導して下さるより高齢の方々に呼びかけ、有志を募った上で「校外教師」の役割を担っていただく。勿論、これといった資格も教員免許も不要とする。では、実際にこの人たちに何を担当していただくか。それは「学校の授業」では教えないことだ。例えば、ご自分の子供の頃にやった遊びを今の子供たちに手取り足取り伝授してもらおう。缶蹴り、竹とんぼ、独楽回しなどをできれば道具も共に手作りしながら楽しむ空間を作り上げていく。また、群馬の風習や長く受け継がれてきたものに関して子供たちに実体験に根ざしたレクチャーもお願いしてみる。勿論、これらのことを安直に有志の方々に委託することはしてはならない。むしろ、そこに親も行政も進んでコミットし、手伝いをしながら自分たちもこの群馬が有する有形、無形の素晴らしいものを体感していく。そして、結果としてそこで与えられたものが親子の共有財産になり、家庭での触れ合いをよりスムーズなものへと導いていく。表題に敢えて「みんな」と条件を付けたのはそんな思いからである。子供の成長のために老若を問わずして県民の全てができることを分担していく。そうした全員参加型の教育が群馬の未来を切り拓いていくのではないだろうか。

先述したように幸いにも群馬にはソフト・ハード両面にわたり昔の良きものを受け継いで今に生きる無数の財産がある。この他県にはないであろう恵みを生かさぬ手はないはずだ。最近の日本ではともすれば何をすることも箱物（テーマパーク）を林立させ、結果的には遊びの全てに商業主義が横溢して我々が無意識のうちに消費活動に参加させられている風潮がある。しかし、この群馬では自然や人といった存在のフル活動でお金をかけずとも子供たちの教育に寄与できる生産活動の可能性が町のいたる所に準備されていると言っても言い過ぎではない。

アフリカの古いことわざだったろうか、「一人の老人の死は一個の図書館の消滅に等しい」という言葉をどこかで耳にした記憶がある。世の中には「持ち腐れ」という悲しい言葉がある。せっかくの自然の恵みや人的な財産をそのままにすることほど無意味なことはない。

既に動き出している民間活動の中にはこうした可能性への深い示唆を与えてくれるものが少なからず存在する。ここでは自らが見聞した範疇で事例を挙げてみたい。例えば古くから前橋市民に親しまれてきた中心部の弁天通り商店街。かつては人の波で賑わったというこの通りも近年は空き店舗も目立ち、行き交う人もまばらになっている。しかし、地元の人々の活性化への情熱の許、定期的に弁天を冠した定期市が開催されるようになっていく。そして辻辻には手作りの郷土の味が湯気を立て、子供たちのための素朴な遊びのできる空間作りがなされている。この地道な努力の成果定期市の日をはじめ、寂寥のどこか漂っていたこの町にも徐々に人々、そして子供の嬌声が戻ってきているようにさえ思える。この現象をリードしているものはやはり人の心、人の絆だ。それが少しずつ糸のように結び合っただけで大きな喜び、癒しの空間へと町を作り替えていく。これは教育にとっても同様のことが言えるだろう。

また、民間主導ではあるが、赤城などで運営されている自然学校や体験教室の存在も貴重である。我が家の子供たちも過去に参加させてきたが、市街地では味わえない自然の空間に身を置き、日常とは隔絶した新鮮な体験学習を受けることは親の想像以上の感動を与

えてくれている。「コンビニ」が象徴するように快適で簡便な生活が当たり前と思いきみがちな生活にこうした場は新鮮な風穴を子供に開けてくれているような気がする。事実、我が家の息子は自然学校の行き帰りに赤城の林の中を長い時間をかけて登り、バスが遅ければ来るまで寒い中を友と背中を合わせ、談笑することで暖をとることがかえって忘れられない思い出になっている。いわば「不便」であるということが逆に得難い教育の場を子供たちに与えてくれる例にもなっている。「もの足りて心寂しき浮き世かな」と言うけれど、何もないことが子供たちに考えること、助け合うこと、自ら問題を乗り越えることといった生きる為の基礎教育を自然に与えてくれる。

このような思いに立って、普く県民が様々な知恵を出し、助け合いのネットワークをつくりあげることによって新しい「ぐんまの教育」が展開されていくのではなかろうかを感じる。新しい材料を用意しなければできない教育は安直であり、レベルも高いとは思わない。その意味で今あるものと人をそのまま生かし、再生産ともいえる活動に踏み出すことこそ今の群馬に求められていることだと思う。人の心で生み出す新しい「群馬の教育」。それは文字通り地域発信、全員参加型の「ふるさとルネッサンス」である。